C—7 幼児期初期の相互交渉の形成について ── 2才前後の2児間の場合 ──

岡野稚子

目的　人と人とのかかわりについての社会性の発達は、乳児期の母親へのattachmentの形成などを経た後、1才半頃から同年令児との交渉が成立しはじめる。そしてこの友交関係の形成は幼児期の遊び行動の遂行にとって重要な役割を担うものである。そこで、初期の友だち関係の形成のすじみちとそのダイナミズムの変化について2児間における相互交渉の形成を事例として明らかにすることを試みた。

方法　対象児は家庭保育されているN児とD児。ともに男児でD児が1ヶ月年長。原則として週2回30分間自由に遊んでいる場面を観察記録した。観察時の年令はN児が2才±5ヶ月（1才7ヶ月から2才5ヶ月まで）（D児は1才8ヶ月から2才6ヶ月まで）。計71回。

結果　観察1回あたりの接触（コンタクト）数は、年令による発達的変化を示していないが、接触により生ずる相互作用（インタラクション）の長さの平均は漸次増加している。接触づけの内容は、模倣によるものが初めは多くを占めている（65.3%）が年令の増加とともに急速に減少し（13.6%）、代って接近・提示・提案・参加などの行動で働きかけるものが急速に増加する（4.1%→42.8%）。呼びかけ・教示・質問・依頼などの主に言語表出によるものも徐々に増加する（8%→29.8%）。また、相手にとって不快となる接触（マイナス接触）づけの出現頻度には発達的変化は見られない。

接触づけの内容と相互作用の長さの関係は、模倣によるものはほとんど相互作用の発展をもたらさない一方で、マイナス接触や、接近・提示などによるものは次々と相互の反応をひきおこすようであり、また、一つの相互作用の発展してゆく過程の中で関係が変化してゆく場合が、年令の増加とともに次第に多く認められた。